京都帝國大學法科大學

經濟論叢

第五卷　第二號

大正六年八月一日發行

論說

營業稅ヲ賦課スキ（營業ノ範圍……法學博士　神戸正雄
純粹資本（資金）ト資本財……法學博士　河上肇
中壽ノ說（二、完）……法學博士　財部靜治
現代的保險ノ成立（二）……法學士　小島昌太郎

時事問題

製鐵業ノ奬勵……法學博士　戸田海市
支那ノ裁厘加稅問題……法學士　木村增太郎

雜錄

歐洲戰亂ノ南米ニ及ボセル影響……山本美越乃
ゆご・すらう民族運動（二）……米田庄太郎
福島山形二縣ノ製絲業……法學士　河田嗣郎
臺灣人口動態統計十年報ヲ讀ム……文學博士　內田銀藏
戰時利得稅ノ諸例……法學博士　神戸正雄
學界ノ巨人しゅもらー逝ク……法學博士　神戸正雄

福島山形二縣ノ製絲業

河田嗣郎

予ハ本誌前號ニ於テ群馬縣ノ製絲業ノ現狀一般ヲ紹介シテ置イタ。茲ニハ進ムデ福島、山形二縣ノ斯業ノ概要ヲ述ベテ見タイト思フ。

(一)一般狀態　福島山形両縣ノ製絲業ガ全國製絲業ノ中ニ於テ如何ナル地位ヲ占メテ居ルカハ、前號群馬縣ノ斯業ノ地位ヲ明カニセムガ爲メニ示シタル比較表ニ照シ見レバ、容易ニ之ヲ知ルコトガ出來ル。卽チ之ヲ生絲生產高、製絲戶數、繰絲釜數等ニ就イテ見レバ、大正四年度ノ統計ニ於テ製絲戶數デハ福島縣ハ全國第三位ニ居リ山形縣ハ第四位ニ居リ、群馬、長野ヲ除イテハ

其右ニ出ヅルモノハナイガ、繰絲釜數トナツテ來ルト、福島ハ依然第三位ニ居ルニ拘ラズ山形ハ下リテ第七位ニ落チ、更ニ製絲數量ニ至ツテハ、福島山形共ニ下リテ前者ハ第七位後者ハ第八位ヲ占ムルニ過ギヌ。[1] 此ノ事實ニ因テ是ヲ觀レバ、福島、山形二縣ノ製絲業ハ其ノ製絲戶數一戶平均及ビ繰絲釜數一釜平均ノ生產量ガ長野群馬、愛知、埼玉、山梨、岐阜等ノ諸縣ノソレニ比シ割合ニ僅少ナルヲ道ハナクテハナラヌ。勿論之ハ平均ニ就イテノ話デアルカラ、個々ノモノニ就イテハ自ラ別個ノ觀察ヲ要スル。惟フニ群馬、埼玉、福島、山形ノ如キニ在リテハ、其ノ製絲業ガ尙ホ未ダ十分資本的ニシテ大規模ナル器械生產タルヲ得ザルモノアリ、從テ之ヲ長野、愛知ノ如キニ比シテ製絲業者ノ戶數ハ多キニ拘ラズ、其ノ生產量ノ割合ニ小ナルヲ見ル次第デアラウ。

仍テ之ヲ繰絲釜數ニ於ケル諸縣比較ヲ見ルニ、福島、山形ノ二縣ハ埼玉縣ト共ニ十釜以上ノ製絲者戶數、群馬、長野、愛知ノ諸縣ニ比シテ遙カニ少ク、又器械製絲ヲ爲ス戶數ニ至ツテモ同樣デアル。[2] 然ルニ座繰製絲家ノ戶數ニ至ツテハ二縣ハ群馬縣ニ亞イデ全國第二位（福島）及第三位（山形）ヲ占メテ居ル。[3]

サレバ卽チ福島、山形二縣ノ製絲業ハ之ヲ全國ニ於ケル地位ト云フ點ヨリシテ觀レバ、群馬、埼玉ナドト茲ビ稱サル可キモノデアツテ、前號吾人ガ群馬縣ノ斯業ニ就イテ述ベタル所ハ、此點ニ於テハ同樣ニ又此ノ二縣ニモ當篏マルモノト見テ、大體ニ於テ誤ナイノデアル。卽チ共ニ尙ホ未ダ十分資本的ナルヲ得ズ工場組織ニ依ル大規模ナル器械生產タル點ニ於テ未ダ容易ニ長野縣ニ於ケルガ如クナルヲ得ザルモノト見テ大過ナイ。

次ニ進ムデ福島山形二縣ノ製絲業ヲ二縣ソレゾレノ現狀ニ於テ觀レバ、先ヅ其ノ生產量ニ於テハ左表ニ示スガ如キ概況デアル。

◎第一表＝福島縣ノ繰絲生產額[4]

	生絲	玉絲	屑絲	屑物	眞綿
明治四十二年	二一七、〇三四貫	七、九六九貫	三三、七〇七	八、八〇九貫	九、〇二九貫
同　四十三年	二三〇、三三八	八、三三四	二七、七二一	八、六四二	二一〇、六九九

1) 本誌前號拙稿「群馬縣ノ製絲業」第一表參照
2) 同上第二表及第三表參照
3) 同上第四表參照
4) 福島縣第十四回主要物產統計16-18頁

同　四十四年	一四四、一六〇	八、六七六	二九、五三八	九、四五八	一一、九九九
大正元年	一四六、〇八五	八、八四六	一六、八二一	九、〇四〇	一〇、一一〇
同　二年	一四八、六四九	八、六三九	二九、一八九	一〇、六二五	九、五九九
同　三年	一四八、九一〇	一〇、〇四六	三三、三八九	九、五七六	一一、五〇九

◎第二表ニ山形縣ノ繭絲生產高[5]

	生絲玉	絲	熟斗絲	生皮苧	屑物	眞綿
	貫	貫	貫	貫	貫	貫
明治四十三年	一一〇、六三二	三、九三五	四、八三	一四、九六一	一二、一一八	四、三九九
同　四十四年	一〇六、〇九五	五、四九五	五、七三八	一五、九〇七	一〇、一四〇	四、五二一
大正元年	一〇六、〇四四	六、八〇二	五、八〇一	一四、八七七	一〇、九六一	四、九一〇
同　二年	一〇六、二一四	六、六六六	五、一九九	一八、八三七	一〇、八四九	九、三七二
同　三年	一一二、三三三	六、九七一	五、三一〇	一九、一六〇	九、八〇七	四、九一〇
同　四年	一〇一、四一六	六、五六〇	—	—	—	—

右二表ノ示ス所ニ因ルト、二縣ノ生絲業ハ比年健實ノ發達ヲ遂ゲツツアルヲ知ルニ足ル可ク、生產量ノ上ヨリノミ之ヲ言ヘバ、福島縣ノ發達ハ山形縣ニ比シテ更ニ顯著ナルモノガアル。

尙是ヲ器械製絲ト足踏及ヒ座繰製絲トニ類別シテ見ヤウナラバ、

◎第三表ニ福島縣製絲高類別表[6]

	器械製絲		座繰製絲	
	數量	價格	數量	價格
	貫	円	貫	円
明治四十三年	二、一三一	二、三六〇	九一、七六六	四、三三、一五六
同　四十四年	二、六九二	二、三三一	九四、三九二	四、四三一、七三四
大正元年	四、四七七	四、四七〇	八〇、〇九五	三、七六四、四六五
同　二年	七、六〇	四、〇一六、一〇八	七六、九三〇	三、八四六、五〇〇
同　三年	一、九六七、四四〇	四、〇一六、一〇八	七四、九一七	三、九八〇、六八〇

◎第四表ニ山形縣製絲高類別表(生絲)[7]

	器械製絲		足踏製絲		座繰製絲	
	數量	價格	數量	價格	數量	價格
	貫	円	貫	円	貫	円
明治四十三年	七〇、三三九	四、〇四一、四〇九	五、三三七	二、五三四、四八一	三、四六九	一、五四七、八六八
同　四十四年	七一、六〇	四、〇一六、九二一	五、五三一	二、七一八、三五四	三〇、三六八	一、三七二、三六四
大正元年	七五、一六一	四、四五五、九九六	五、八六六	二、六六、六一八	二六、六一〇	一、一〇一、〇四三
同　二年	八〇、九六六	四、九一〇、一八八	四、二八一	二一八、三四〇	一〇、九六七	九九九、九二〇
同　三年	八八、六六五	四、九八八、〇四五	四、四六一	二八、七一六	一九、〇八七	八〇六、一二〇

右二表ニ照シ見レバ二縣ニ於ケル製絲ガ比年器械製絲ニ向ヒツツアルノ勢顯著ナルヲ知ルニ足ル可ク、特ニ福島縣ニ於ケル器械製絲量ノ增加ト山形縣ニ於ケル座繰製絲量ノ減少トハ最モ人ノ目ヲ惹クニ足リル。而シテ福島縣ニ於テ器械製絲量ノ增加セル割合ニハ座繰製絲量ノ減少シテ居ラヌコトハ、新タナル器械製絲ノ增加ノ著大ナルヲ語リ、山形縣ニ於テ座繰製絲及ビ足踏製絲量ノ減少著明ナルニ器械製絲量ノ增加ノサホド大ナラザルハ、資本其他ノ關係ニ於テ同縣下ノ器械製絲ノ發達ノ十分急速ナルヲ得ザル事

5) 大正三年山形縣統計書(勸業之部)111-113頁。山形縣案內27頁
6) 福島縣之產業49頁
7) 大正三年山形縣統計書(勸業之部)107-109頁

情アルヲ暗示スルモノト見ナケレバナラヌ。次ニ繰絲從業人員ノ多少ニ由ル分類ノ下ニ製絲工場數ヲ示シテ見ヤウ。

◎第五表＝福島縣製絲場從業人員別表[8]

(一)器械製絲

	十人繰未滿	十人以上五十人繰未滿	五十人以上百人繰未滿	百人繰以上	計
明治四十三年	九	三三	三	一六	六一
同　四十四年	八	三六	一〇	一八	八三
大正元年	五	四三	七	二一	八六
同　二年	三	三六	一一	二三	八四
同　三年	四	三三	九	二三	七三

(二)座繰製絲

明治四十三年	二九	六〇	八	一一	二九六九
同　四十四年	二九	六七	一	一〇	二九七五
大正元年	二七	二五一	九	五	二七二〇三
同　二年	二六	八二〇	二一	六	二六八七七
同　三年	二一	四二一	五七	二四	二一五二九

◎第六表＝山形縣製絲場從業人員別表[9]

	十人繰未滿	十人以上五十人繰未滿	五十人繰以上百人繰未滿	百人繰以上	計
明治四十三年	二七〇	二六七	六六	一七	三三〇四二二
同　四十四年	二九	二六八一	七八	一九	二九四九七
大正元年	二六	二六八	六六	二〇	二六四二三
同　二年	二一	二四五	六六	一八	二四五四
同　三年	二一	二四〇	五五	二一	二四二五

右二表ニ因テ是ヲ觀ルニ福島縣ニ在リテハ器械製絲ニ於テハ五十人繰未滿ノモノハ漸次減少シツツアルニ百人繰以上ノモノハ增加ノ勢ヲ示シ、座繰製絲ニ於テハ一般ニ減少ノ勢著ルシク、特ニ十人繰未滿ノ小規模ノモノニ於テ減少ノ勢著大デアル。而シテ山形縣ノ方ハ器械製絲ト座繰製絲トヲ區別シタル統計ヲ得難イガ右表ノ示ス總計數ニ於テハ製絲戶數ハ漸次減少シ特ニ十人繰未滿ノモノ、減少ガ顯著ニナツテ居ル。仍テ考フルニ、他方製絲業全體トシテノ生產量ハ先ニ之ヲ示シタル如ク[10]二縣共ニ年々增加ノ勢ヲ示シテ居ルノデアルカラ、右ノ製絲戶數減少ノ事實ト併セ之ヲ見レバ、二縣下ニ於テモ亦製絲業者ノ業務經營規模ハ漸次ニ大トナリ一戶平均ノ生產量ハ年ト共ニ增加シツツアルモノト見ルノ外ハナク、小規模ノモノハ漸次大トナリ或ハ大規模ノモノニ壓倒サレ若クハ併合サレ、トモカクモ企業トシテ一經營ノ規模ハ比年大トナリ

8) 福島縣之產業48頁
9) 大正三年山形縣統計書（勸業之部）104頁
10) 第一表及第二表參照

ツツアルモノト見ルノ外ハナイ。

要スルニ福島山形二縣ノ製絲業ハ其ノ全國ニ於ケル地位ヨリ云フモ其縣ノミノ產業トシテ是ヲ觀ルモ、洵ニ重要ナル意義ヲ有スルモノデアツテ、其ノ生產量ノ增加、其ノ生產規模、經營組織等ヨリ考ヘテ、比年着實ナル發達ヲ遂ゲ、農家ノ副業ヨリシテ漸次獨立ノ工業企業化シツツアルヲ知ルコトガ出來ル。

(二)山形縣當局ノ方針 以上述ブル所ハ福島及ビ山形二縣ニ於ケル製絲業ノ一般狀態デアルガ、今ヤ進ムデ少シク、二縣ノ製絲業ノ特色トスル所ヲ窺ツテ見ルノ必要ガアル。先ヅ山形縣ノ方カラ觀察スルト、同縣ノ製絲業ニ就イテハ縣當局ノ方針ニ於テ甚ダ吾人ノ意ヲ得タルモノガアルカラ、暫ク其ノ大樣ヲ述ベテ見タイト思フ。

山形縣デハ當初縣ノ方針トシテハ製絲業ハ成可ク之ヲ副業組織ニヨラシメ小規模生產ヲ以テシテ其ノ製品ハ之ヲ共同荷造販賣ノ方法ニヨラシメントシタ。卽チ製絲ノ業ハ養蠶ノ業ト共ニ之ヲ農家ノ副業トナシ以テ農家ノ經濟ヲ助ケシムルノ傍、斯カル分散的ナル小規模生產ヨリ生スル販賣上ノ不便ト不利トハ之ヲ共同荷造販賣ノ方法ニ依ツテ補ヒ、不整一ナル小量ノ絲トシテハ十分ナル商品能力ヲ有シ得ザルモノヲ、共同荷造シ又共同販賣スルコトニ依リテ整一ナル然カモ大量的ノモノト爲シ、以テ其ノ內地市場特ニハ海外市場ニ對スル商品トシテノ適當ナル性質ヲ得セシメ、其ノ輸出ヲ可能ニシ、又其ノ價格ヲ高貴ナラシムルニ資セントシタノデアル。而シテ又其ノ製絲ハ群馬縣ナドニ於テ特ニ著明ナルガ如ク之ヲ產業組合ノ事業タラシメ、之ニ依リテモ亦分散制ノ缺ヲ補ヒ、商品ノ整一ト大量化トヲ圖ラント企テタノデアル。

然ルニ其後縣當局ニ於テハ製絲業ノ如キ種類ノ業務ハ之ヲ技術的ニ見ルモ又之ヲ業務經營ノ上ヨリ見ルモ企業トシテノ一般ノ性質ヨリ考スルモ分散的ナル副業ニ適セザルモノナルコトニ氣ガ付キ、漸クニシテ從前ノ方針ヲ變ズルコトトナツタ。製絲工業ガ家內工業ヤ組合事業ニ適セザル性質ヲ有スルモノナルコトニ就イテハ夙ニ

一部ノ人々ノ間ニ其ノ意見ノ發表セラレテモアル所デアルガ、兎モ角山形縣當局者ハ夙ニ此點ニ就キテ大ニ見ル所ガアッタ。今製絲業ガ分散的ナル家內工業ニ適セザルノ理由トセラルル所ヲ窺フニ(一)製絲業ハ座繰製絲ハ固ヨリノコト器械製絲ト稱セラルルモノモ之ヲ技術的ニ見レバ器械ノ働ニ待ツ所ハ甚ダ些少デアッテ技術ハ主トシテヤハリ工女ノ手ノ働ニ待ツ所ノモノガ多ク、工女ノ熟練ト技倆トハ、其ノ製品ノ品質數量ノ上ニ至要ナル關係ヲ有スルモノデアル、然ルニ之ヲ副業的ナル家內工業トナストキハ、其ノ生產ニ用ヒラル可キ原料モ少ク又其ノ業ニ當ルモノハ本業ノ暇ニ之ニ當ルモノナルガ故ニ、繰業ハ大抵二三ケ月ニシテ盡キ工女ハ年中ノ他ノ長キ月日ノ間ハ他ノ普通農事ヤ家事ニ從事スルコトトナルヲ常トスル。斯クテハ工女ノ熟練ハ到底十分ニ之ヲ望ムコトガ出來ヌ。(二)次ニ又此ノ分散的生產ノ下ニ於テハ一ノ工女ト他ノ工女トノ間ニ何等ノ連絡ナク各人思ヒ思ヒニ自分勝手ノ繰絲ヲ爲シ其ノ製絲工程ヲ監督スル者ナク又其ノ生產品ニ就キ十分ノ監督行ハレ難キ爲メニ、生產サレタル生絲ハ品質マチマチニシテ甚ダ不整一ナルヲ免レ難イ。從テ其ノ商品能力薄ク其ノ商品トシテノ價値ハ少カラザルヲ得ヌ。例ヘバ山形縣內ニ於テモ年額三千貫ノ絲ヲ九十ケ所ニテ製絲スルトスレバ極端ニ云ヘバ九十種ノ絲ガ出來、然カモ亦工女ノ腕ニヨリテ一異リ實ニ製品雜駁ナルヲ免レズ。輸出品トシテハ甚ダ不向デアッテ其ノ三分二シカ輸出檢査ニ合格セザルヤウノ有樣デアッタ。(三)次ニ又小規模製絲ヲ以テシテハ繭ノ乾燥ヲ十分ニスルコトガ出來ズ之ハ實ニ著大ナル影響ヲ製絲ノ上ニ及ボスモノデアル。(四)次ニハ又副業的ニ小規模製絲ヲ爲スガ如キ者ハ大抵其ノ資力ノ薄弱ナルヲ例トスルカラ、生絲商人ノ類ヨリ絲ノ代金ノ前借リヲ受クルニアラザレバ其業ヲ營ミ得ザルガ如キ者多ク、爲メニ其ノ利子支拂ノ必要上生產費ノ嵩ミ來ルヲ免レ難キノミナラズ、製絲ニ伴フ利益ハ大部分債權者タル絲商人若クハ家內工業ニ於ケル企業者ノ爲メニ壟斷セラレ、常ニ

すうぢっちんぐノ好餌トナルヲ例トスルノデアル。卽チ生絲代價ノ如キモ仲買人ナドノ云フガ儘ニ自由ニセラレ其上前借金ニ對シテハ高キ利息ヲ取ラレ、生產者ハ實ニ僅少ナル繰絲勞賃ヲ得テ滿足セナクテハナラヌ弊害ニ陷リ易イノデアル。

凡テ右等ノ如キ理由アルガ爲メニ山形縣當局ニ於テハ近來ハ分散的ナル小規模製絲ノ方針ヲ改メ、製絲ハ成可ク集中的ナル大規模企業トシテ發達セシムル方針ヲ執リ、可也强大ナル資力ヲ備ヘタル者ガ器械使用ノ製絲工場ヲ起シ、工場企業トシテ之ヲ營ムヲ以テ最モ其所ヲ得タルモノト爲スコトトナツタ。斯クテ最近ニ於テハ百釜以上ノ工場ノ新設ヲ奬勵シ既存ノ小工場モ成ル可ク之ヲ增資擴張セシムルニ努メテ居ル。

此ノ山形縣當局ノ方針ハ大體ニ於テ吾人ノ見ル所ト一致シテ居ルノデアツテ、吾人ハ前號群馬縣ノ製絲業ヲ論ズル場合ニモ所見ノ一端ヲ開陳シ置キタルガ如ク、生絲ノ如キ世界的市場ヲ有シ其ノ取引大量的ニシテ然カモ價格ノ變動多ク、輸出品トシテ品質ノ整齊ナルヲ必要トシ爲メニ嚴重ナル輸出檢査ヲ强制サルルガ如キ物ハ、其ノ生產ヲ家內工業組織ヤ產業組合ノ事業トシテ行フコトハ甚ダ不適當デ之ハドウシテモ資本的ナル工場企業トシテ行ヒ、其ノ品質ヲ整一ナラシメ其ノ生產ヲ大量的ナラシメ又其ノ生產費ヲ省キ其ノ商品トシテノ賣買取引ニ於テモ生產者ノ利益ガ十分ニ代表セラルルヤウノ仕組ニシナクテハナラヌト信ジテ居ル。然シ今此等ノ事ニ就イテ餘リ立入ツテ論議スルノ暇ハナイガ、兎ニ角此ノ一般的見地ヨリシテ吾人ハ山形縣當局ノ方針ハ大體ニ於テ甚ダ其當ヲ得タルモノナルヲ思フト云フコトダケハ之ヲ一言シテ置キタイ。而シテ山形縣ニ於テハ此ノ根本方針ノ下ニ於テ着々技術ノ改良ヲ計リ、工場ハ成ル可ク縣內諸地方ニ設立セシメ其ノ地方地方ニ於ケル產繭ヲ原料トシ、又其ノ地方ノ工女ヲ使用シテ繰絲ヲ爲サシムルノ方針ヲ取ツテ進ミツツアルトノコトデアル。

(三)山形製絲ノ特色 次ニ山形縣ニ於ケル製絲ノ

技術的方面ニ於ケル特色トシテ一言セザル可ラザルハ、其ノ繰絲ガ所謂「沈取」ナルコト之デアル。卽チ大抵製絲ハ何レノ地方ニ於テモ乾繰セル繭ヲ各工女ノ許ニ致シ工女ハ之ヲ煮沸シツツ繭ノ浮キタル儘緒ヲ立テテ繰絲スルノヲ例トスルガ、山形縣ニ在ツテハ明治六年頃ヨリシテ沈ミ取リナルモノ行ハレ今日デハ同縣一般ノ繰絲法トシテ一特色ヲ爲シテ居ル。卽チ之ハ繭ヲバ豫メ水又ハ或液體ヲ加ヘタル水中ニ入レテ煮沸シ然ル可キ時分ニ冷水ヲ加ヘテ又煮沸シ繭ノ空胴內ニ水ノ浸潤スルニ及ビ然ル可キ時機ニ之ヲ取出シ、其取出シタルモノヲ工女ノ手許ニ致シテ繰絲セシムル　從テ工女ノ繰絲ノ際ニハ釜中ノ繭ハ皆水中ニ沈ミタルママ繰絲セラルルガ故ニ卽チ沈取ノ名アル次第デアル。

浮取ト沈取トノ利害長短ニ就イテハ吾人ハ技術方面ニ關シテハ全ク素人タルガ故ニ、自ラ之ヲ判斷スルノ能力ヲ持タヌガ、山形縣當局ノ如キハ沈取ノ甚ダ優良ナル方法タルヲ信ジ普ク之ヲ推奬シテ居ル。而シテ其ノ長所トセラルル主ナル點ハ、緒ノ立チ易ク又水分ガ浮取ノ如ク一部分ニ偏局セズ全繭丸ニムラナク行渡ツテ居ルタメニ解舒容易ナル點ニ存スル。從テ沈取ニ於テハ其ノ工程大ニ捗リ浮取ニ比シ四割位ハ大ナリト稱セラレテ居ル。斯ク工程ノ大ナルハ繭ノ煮沸ト繰絲トガ分業トナツテ居ル所カラモ由來スルノデアルガ、兎モ角繰絲ニ當ツテ索緒ノ容易デ解舒ノ快滑ニ行ハレ仕事ノ樂クナコトハ爭ハレヌ所デアル。而シテ又沈取ニ由ル生絲ハ其ノ光澤一定シ抱合モ良好ナリトセラレテアル。其ノ長短ニ就イテハ尙ホ專門家ノ研究ヲ要スル所デアラウガ、素人目ニハ右等ノ如キ長所アルコトハ疑ナキ所ノヤウデアツテ、若シ此ノ方法ニ短所アリトスレバ、ソレハ恐ラク右ニ上ゲタル所以外ニ存スルデアラウ。ソシテ其ノ長短ノ比較ニ至ツテハ專門家ガ專門的智識ヲ以テ之ヲ判斷スルノ外ハナイ。

尙ホ又山形縣蠶業技術家ハ右沈取ノ爲メニスル繭ノ煮沸用ニ用ユ可キ材料ヲ蔀ヨリ製造スルコトヲ發明シタト云フコトデアツテ、其ノ效能ハ

少カラザルモノナリト稱セラレテ居ル。之ニ關シテモ吾人ハ何等ノ判斷ヲ爲ス可キ專門的智識ヲ持タヌガ、兎モ角山形縣當局ニ於テ鋭意斯業ノ改良ノ爲メニ努力シテ居ル跡ハ確カニ之ヲ認ムルコトガ出來ル。吾人ハタダ其ノ益々努力シテ益々有效ナル效果ヲ上グルニ至ラムコトヲ囑望セザルヲ得ナイ。

次ニ又山形縣製絲業界ノ一特色ト見ル可キハ、其ノ工女ト雇主トノ關係ノ太ダ圓滿ナリト稱セラルルコトヽデアル。之ハ勿論程度問題デアルケレドモ、長野其他ノ諸地方ガ工女ノ供給不足其他ノ問題ニ行悩ムデ居ル際、山形縣デハ其ノ供給ニ事ヲ缺カザルノミナラズ、雇主トノ間ノ圓滑ナリト噂サルルダケデモ、ソハ洵ニ喜ブ可キコトト謂ハネバナラヌ。山形縣下ニ於ケル製絲職工ハ合計三一、三七〇人デアッテ、就中女工ノ數ハ三一、〇三〇人ノ多キニ上ッテ居ル。此ノ三萬餘人ノ工女ハ固ヨリ殆ンド全部同縣人デアッテ、他府縣ヨリ入レラレタルハ寔ニ寥々タルモノデアル。而シテ同ジ山形縣ノ中ニ在ッテモ南部地方ハ工女ノ狀態特ニ良好デアル。各工場ニ於ケル工女ハ全部通勤デ遠キハ一里ノ道ヲ通フ者モアル。ソシテ雇ハレテヨリ一年ハ無賃ニテ見習トシテ働キ二年目ニ半賃金ヲ得三年目ヨリ本工女トナルノダガ、其ノ勤續年數ハ平均七、八年ニ及ブト云フ。賃金ハ十匁二錢四厘ヲ標準トシ勤勉ナル者ハ一年内ニ二百圓ヲ儲クルノ有樣デアル。惟フニ山形縣ニ於ケル工女ノ需給狀態其他一般ニ其ノ境遇ノ比較的良好ナルニハ種々ノ原因ノ存スルコトデアラウガ、今ヤ工女ニ關スル問題ハ我國製絲業界ノ一難問タラントスルノ時、山形縣ニ於ケル此ノ良好ノ狀態ハ何卒長ク保存サレタイモノデアル。尤モ我國ニ於ケル製絲工女ノ問題ハ紡績工女ノ問題ト同樣其ノ供給不足ノ問題デアルカラ、山形縣ニ於テモ將來製絲業ノ大ニ發達シ縣人ヲ以テシテハ其ノ工女ノ供給不足ヲ告グルガ如キ狀態ヲ見ルニ至ルニ於テハ、長野縣ナドニ於ケルガ如キ企業家ノ苦痛ヲ生ズルニ至ルコトナシトモ限ラヌガ、工女ノ取扱ヤ雇主ニ對スル感情ヤニ於テハ、何

卒圓滿ナリト稱セラルル現狀ノママニ押進ミ更ニ一層良好ノモノタラシメタイモノデアル。蓋シ現時ノ技術狀態ヲ以テシテハ製絲業ノ成績ハ一ニ繫ツテ工女ノ良否、ツマリ、其ノ腕ト精神トニ在リト言ハナケレバナラヌ次第デアルカラ。

(四)福島製絲ノ特色　次ニ福島縣ニ於ケル製絲業ニ就イテハ其ノ特色ト見ラル可キモノハ、其ノ企業組織ガ分散的ナル家內工業組織ヲ主トスルコトト、然カモ其ノ分散的ナル生產品ヲ共同荷造シテ一定ノ商標ノ下ニ商品化セラルルコトト之デアル。勿論之ハ同縣製絲ニ特有ナルモノトシテ特ニ研究ニ値スルト云フホドノコトデハナイガ、其ノ共同荷造所ノ組織ト事業トニ就イテハ多少ノ攷慮ヲ拂ハナクテハナラヌ。

福島縣ニ於テ家內工業的ニ生產セラルル生絲ハ所謂「折返シ絲」ナルモノデアツテ、之ハ養蠶家ガ自家生產ノ繭ヲ座繰製絲シテ所謂折返シ絲ノ形ニ於テ市場ニ出スモノナレバ、更ニ之ニ加工シテ其ノ品質ヲ整ヘ之ヲ普通ノ捻絲ト爲シ、又其ノ品位ヲ證明ス可キ信用アル商標ヲ附シ且ツ集メテ大量的ノモノト爲スニアラザレバ輸出品トハナリ得ナイノデアル。サレバ折返絲ハ川俣地方ノ羽二重原料ニ用ヒラルルトカ、乃至ハ一般ニ所謂地遣トシテ附近地方其他內地製織ノ原料ニ用ヒラルル場合ハ兎モ角デアルガ、之ヲシテ少シク廣キ市場ニ出サンガ爲メニハ、ドウシテモ何等カノ方法ニ依ツテ右ニ述ブル商品化ヲ行ハナクテハナラヌ。此ノ必要ニ應ジテ生レ出デタルモノハ卽チ福島市ニ在ル共同生絲荷造所デアル。

共同生絲荷造所ハ合資會社トシテ折返絲ノ加工荷造ノ寄託ヲ受ケ又之ヲ保管スルヲ以テ其業トスルモノデアルガ、其ノ設立當時ノ事情及ビ其後ニ於ケル事業ノ方針及ビ實狀ヲ聞イテ見ルト、ソレハ決シテ單ナル營利ノ目的ノ爲メニ存在スルモノデハナク、寧ロ福島縣下ニ於ケル製絲業ノ改良發達ニ資シ分散的ナル小量生產ノ有スル種々ノ技術上並ビニ企業上ノ不便不利ヲ補ヒ半バハ公益的ニ其ノ加工荷造ヲ爲シ又其ノ金

融ノ便ノ爲メニ適宜ノ施設ヲ爲シ、以テ福島縣産ノ生絲特ニ折返絲ノ商品能力ヲ高メ其ノ聲價ヲ增シ、其ノ生産者ノ企業上ノ利得ヲ大ナラシメントスルモノデアル。サレバ共同荷造所ニ於テハ生産者ノ寄託スル折返絲ヲ納メテ之ガ品位ヲ檢査シテ所定ノ商標ヲ附シ之ニ加工荷造シテ市場ニ賣出スニ適スル商品トナスト同時ニ、其ノ生絲ヲ保管シ其ノ保險ヲ契約シ又其生絲ガ質入擔保セラルル場合ニハ其ノ質權者ノ爲メニ之ヲ保管スルノ任ニ當ル次第デアル。故ニ共同荷造所ハ一手ニテ生絲檢査事業ト其ノ加工荷造ト其ノ保管ニ關スル倉庫事業トヲ行フモノト見テ大過ナク、一種特有ノモノタルヲ失ハヌ。

惟フニ福島ニ於ケル共同荷造所ノ如キハ分散的ナル家內工業トシテ製絲ノ行ハルル場合ニハ何レカノ形ニ於テ生レ來ラザルヲ得ザルモノデアツテ、群馬縣ニ産業組合若クハ其ノ聯合會ノ發達シ其手ニ依リテ行フ所ヲ、福島縣ニ於テハ合資會社トシテ行フモノタルニ過ギヌ。而シテ此種ノ事業ハ果シテ之ヲ合資會社ノ如キ組織ノ下ニ行ハシムルヲ可トスルカ或ハ産業組合若クハ其ノ聯合會ヲ以テ行ハシムルヲ可トスルカ、乃至ハ又一種特別ナル公益團體的組織ヲ造リ之ヲシテ行ハシムルヲ可トスルカ等ノ問題ニ至ツテハ大ニ研究ヲ要スル次第デアルガ、兎モ角福島縣ニ於テ此種ノモノノ發生スルニ至リタルハ、蓋シ其ノ必要止ミ難キモノアルガ爲メタルヤ爭ヒ難イ。サレバ若シ福島縣ニ於テ群馬縣ノ如ク製絲業界ニ産業組合ノ發達スルカ、然ラザレバ山形縣ニ於テ之ヲ見ルガ如ク大規模ナル工場企業ヲ奬勵スルカノ方針ノ定メラルルモノアルナラバ、此種ノ共同機關ハ恐ラクハ産業組合ノ組織ヲ取ツタカ、然ラザレバ其ノ必要ヲ見ザルモノトナツタデアラウ。然ルニ現ニ之ヲ見ルガ如ク同縣下ニ於テハ製絲業方面ニ大ニ産業組合ノ發達スルデモナク、然カモ依然トシテ家內工業ニ由ル折返糸ノ可也多量ニ生産サルルモノアル限リハ、此ノ種ノ共同機關ハ必要缺ク可ラザルモノデアルカラ、其ハ合資會社カ何カノ組織ヲ取ツテ存立スルヽ外ハナイデアラウ。吾人ハ不

幸ニシテ同縣當局ガ縣下ノ蠶絲業ノ將來ニ對シテ如何ナル大方針ヲ立テ又如何ナル施設ヲ爲シツツアルカヲ聞クヲ得ナカツタガ、其ノ大方針ノ既ニ確定セラレ又其レニ適スル施設ノ講ゼラレツツアラバ至極結構ダガ、若シ然ラズトスレバ、今後必ズヤ、縣當局者ハ縣下蠶絲業ノ企業組織ヲ產業組合的ナラシムルヲ得策トスルカ將又資本的ナル工場企業的ナラシムルヲ得策トスルカニ就キテハ、大體ニ於テ其ノ大方針ヲ樹立シ之レニ適合セル種々ノ指導奬勵其他諸般ノ施設ヲ爲スノ必要ニ迫ラルルコトデアラウ。

分散的ニ生產セラレタル小量ノ生絲ヲ集中シテ其ノ品位ヲ分チ之ヲ一定商標ノ下ニ大量化シ其ノ商品能力ヲ發生增加セシムルト云フ仕事ハ、分散的ナル小規模製絲ノ依然トシテ行ハルル限リハ、其ノ製絲家自身ガ集ツテ共同團體ヲ作リ、自分共ノ共同事業トシテ之ヲ行フガ最モ適當ノコトデアル。此ノ意味ニ於テハ此ノ仕事ハ各製絲家ヲ組合員トスル所ノ產業組合若クハ其ノ聯合會ノ仕事トシテ行フガ最モ適當デアツテ、其ノ仕事ヲバ製絲家トハ全然利害關係ヲ離レタル第三者特ニ會社組織ノモノガ行フト云フハ唯之ヲ形ノ上ヨリ見レバ不適當ト謂ハナケレバナラヌ。元來會社ナル組織ハ商法ノ規定ニ從ツテ存在スルモノデ、營利ヲ目的トスル性質ノモノデアルカラ、其ノ營利會社タルモノガ、ヤヤ公共的ナル性質ヲ有セナクテハ其ノ成績ノ上ガリ難キ右ノ仕事ヲ行フト云フハ、所詮事業ト組織トノ調和ヲ缺ゲルモノト言ハナケレバナラヌ。福島ノ共同荷造所ハ固ヨリ能ク其ノ仕事ノ性質ヲ辨ヘ其ノ事業ハ現ニ甚ダ有效ニ、會社ノ營利ト云フコトヨリモ製絲業者ノ共同ノ利益ト云フコトヲ主眼トシテ行ハレテ居ル次第デアツテ、甚ダ頌讃ニ値スルモノデアルカラ、吾人ハソレヲ彼此云フノデハナイガ、唯ダ一般論トシテハ、此種ノ事業ハ會社組織デ之ヲ行フヨリモ產業組合組織カ或ハ他ノヤヤ公共的性質ニ富ミタル組織ニ由リテ之ヲ行フヲ適當トスルモノタルコトヲ述ベタイト思フノデアル。

福島縣下ニ於テモ既述ノ如ク器械製絲ノ漸次廣

ク行ハルルニ至リ、又工場ノ如キモ大規模ノモノガ追々發達シツツアル有様デアルカラ、家内工業的ナル小規模製絲ハ漸次ニ衰退シ、從テ右等ノ問題モ自ラ解決セラルルコトデアラウガ、若シ縣當局ニ於テモ這間ニ處シ將來ニ對スル方寸ノ既ニ定マリ居ルモノアラバ、希クハ與リ聞クヲ得ムコトヲ。

本文ヲ終ルニ臨ミ予ガ視察ノ際多大ノ便宜ヲ與ヘラレタル山形縣理事官池田繁治氏、同技師小松嘉藏氏、山形縣原蠶種製造所、福島縣勸業課、合資會社共同衛造所、玉絲改良會社、福島縣工業試驗場ニ對シテ深厚ノ謝意ヲ表スルモノデアル。